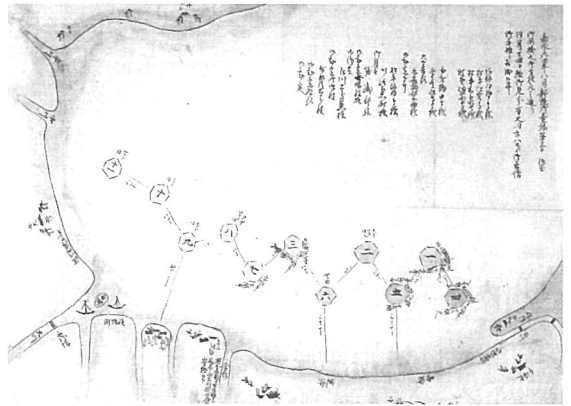


品川御台場

黒船来航と品川御台場の築造

嘉永6年(1853)6月3日のペリー来航は、江戸幕府を長い「鎖国」の眠りから覚ますことになった。ペリー退帆後、幕府はすぐさま江戸湾の海防強化の検討に入り、若年寄本多忠徳、勘定吟味役格江川英龍らによる江戸湾巡視の結果、内海防備のための御台場築造が決定した。

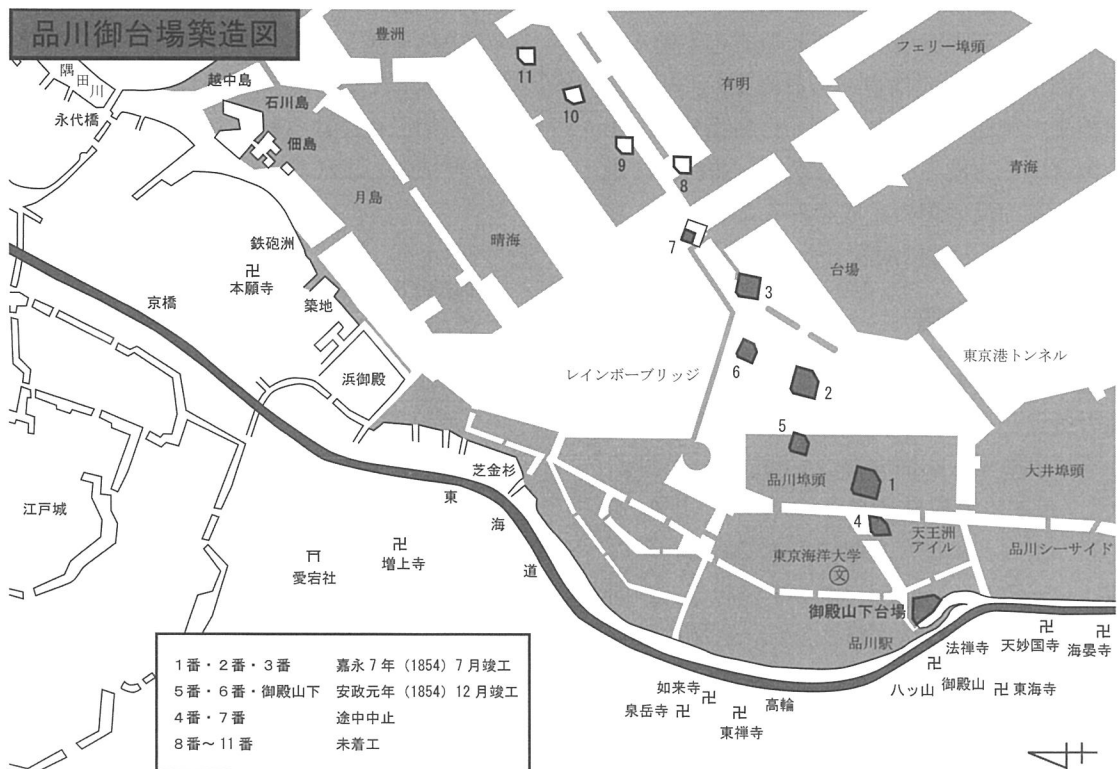
築造計画は、西洋の築城書・砲術書を参考に、南品川狹師町(品川洲崎)から深川洲崎にかけての海上に11基の御台場を築造しようとするものであった。工事は同年8月末に着工し、昼夜兼行で進められた。築造資材としての杭木(松・杉)は関東地方の御林で調達し、石材は相模・伊豆・駿河から海上で輸送し、土砂は品川御殿山、ハッ山、泉岳寺山を切り崩して運び、その数は1日2,000艘に達する日もあった。土取人夫などは第一・第二・第三台場築造



▲嘉永6年の品川御台場築造計画図
(横浜開港資料館所蔵「黒船来航絵巻」より)

時で5,000人にも及び、総工費は約100万両という膨大なものとなった。

第一・第二・第三番は翌年7月に、第五・第六番と途中で加えられた陸続きの御殿山下台場は12月に竣工した。第四・第七番は築造に着手したが、工事半ばで中止し、八番以降は未着手に終わった。





◀品川砲台大砲試発図
(江川文庫所蔵)



▲江川坦庵肖像
(江川文庫所蔵)

江川太郎左衛門英龍（坦庵）

江川太郎左衛門英龍（坦庵。1801-1855）は伊豆韮山に生まれ、同地の世襲代官で坦庵と号した。幼年より武道を修め、かたわら谷文晁らに書画を学んだ。蘭学者幡崎鼎、渡辺華山らに師事して西洋事情を学び、高島秋帆のもとで西洋砲術をきわめ、韮山で砲術塾を開始した。その門に入る者は諸藩主や多くの藩士に及んだ。その海防論は、海上の要地として伊豆が重要であること、海軍の創設、反射炉の建設、農兵論などを説くものであった。

江川は、江戸内湾防衛の第一線を浦賀水道におき、品川御台場築造直前の建議書でも、品川沖を広域の江戸内湾防衛のひとつとして考えていた。御台場の位置は当初の計画案から品川・深川線まで後退させられたが、自ら指揮して6基の御台場を完成させた。しかし、並行して進めていた韮山反射炉の完成をみることなく、安政2年（1855）1月に病没した。

品川御台場の警備

最終的に6基完成した品川御台場は、江戸湾防備の拠点として、徳川將軍家に近い親藩、譜代とそれに準ずる家格を持つ大名によって警備された。最初に警備を命じられたのは、川越、会津、忍、庄内、松代、鳥取の六藩である。その警備は、安政2年（1855）から本格化し、合同演習や警備体制の改善がはかられ、次第に強化されていった。そして、大名を交替させながら、慶応4年（1868）の幕府崩壊直前まで、江戸湾防備の拠点としての警備が行われた。

品川御台場その後

明治維新後の御台場は、大正3年（1914）まで陸軍省が管理していた。この間、明治3年（1870）に第二台場の西端に品川燈台が点燈した〔燈台は昭和32年（1957）廃燈、39年博物館明治村（愛知県犬山市）に移築、43年国重文に指定〕。

第四台場（俗に崩れ台場）は維新当時、緒明菊三郎が陸軍省から借用、明治16年（1883）洋式造船所「緒明造船所」を設け、その後払い下げられた。第三・第六台場は、大正4年（1915）東京市に払い下げられ、同13年東京府知事によって史跡の仮指定を受け、同15年国指定史跡となる。その後、東京湾に浮かぶ6つの御台場は、2つの史跡を残して埋め立てや撤去工事が行われて姿を消していった。今なお当時の面影をしのばせる第三台場は、都立お台場海浜公園として人びとに親しまれている。

御殿山下台場跡地
から出土した石垣石
(当館正面入口脇) ▶



▲第三台場の現状（2007年8月撮影）